



知事対談

中沢新一 × 仁坂吉伸

思想家・人類学者

和歌山県知事

驚異的な記憶力を持ち、破天荒な行動力で世界中を駆け回る。
人類の知性の限界にまで到達した紀州人。

和歌山の偉人 南方熊楠とは

仁坂知事（以下仁坂） ●中沢さんは、明治大学特任教授・野生の科学研究所所長として人類学・民俗学を中心に、人間の心の構造を明らかにしようとする研究を続けられています。また和歌山県の輩出した偉人「南方熊楠」について中学生の頃から関心を寄せられ、熊楠に関する著書も多数執筆されています。そして2016年にはこれまでの研究業績が認められ、田辺市・南方熊楠顕彰会主催の「第26回南方熊楠賞」を受賞されました。

中沢新一（以下中沢） ●受賞は本当に嬉しかったですね。僕の親父は民俗学をやっていて、自宅には石像の写真や古い土器がたくさんあり、それらに囲まれて育ちました。だから縄文土器なんか見ると、作っていた人たちの心理まで分かるような気がして…。そして中学生の時、熊楠の本を見つけたのですが、それがものすごく面白い。キューバ革命では銃弾飛び交う中、一緒に戦ったとか、孫文と交流があったとか書かれていて、民俗学者の柳田國男も、早くから熊楠の才能を認めていたほどで、「こんな面白い人が本当に日本にいたの？」と親父に聞いたんですね。そうすると「にわかに信じられないけど本当らしい」といいます。当時、熊楠の本は随筆集や十二支考などわずかなものしか出版されていませんでしたが、それ以来、とにかくよく読みましたよね。熊楠は僕のヒーローでした。

仁坂 ●世界を股に活躍した熊楠は帰国後、田辺に住居を構え晩年まで過ごしますが、

かなり変わった方だったようです。（笑）しかし田辺の人たちは、「偉い先生」だと尊敬しながら親しくしていたようです。

中沢 ●僕の研究人生において、「南方熊楠」はかなり大きな部分を占め、「森のバロック」の執筆中には何度も田辺市を訪れました。そして居宅の隣にある蔵に研究のために入らせていただき、中瀬喜陽先生^{なかせひさはる}の案内で書庫を見学しました。当時はまだ南方熊楠顕彰館もなく、ほとんど手付かずの状態でした。

仁坂 ●そうなんですか。それで蔵の中はやはり、無秩序な様子だったのでしょうか。

中沢 ●それがそうでもなく、まさしく「熊楠の頭の中」だなと感じました。とはいえ前面にセクソロジー関係の本がずらっと並んでいて（笑）。

仁坂 ●熊楠だから整理されていないが、その無秩序の中でもパツと必要な資料を出せるんじゃないかと思いついて。

中沢 ●それはその通りです。手紙などを見ると分かりますが、まるで星雲^{ほしうん}というか銀河^{ぎんが}^{なみだ}というのか、どこから読めばいいのかわからないぐらいですが、目を凝らしてよく見るとちゃんと秩序があるんですね。書庫の中もまるでそういう感じでした。

知性が爆発？人類の限界？
超人、熊楠の魅力とは

仁坂 ●熊楠の魅力とは何なのでしょう。そして彼はいったい何者なのでしょう。



上／大きな敷地内には熊楠が晩年暮らした居宅や倉庫などがほぼ原型に近い形で再現されている。蔵の中は見た目は雑然としながらも、まるで熊楠の頭の中のように整理されているようだと中沢氏は語る。（南方熊楠邸・田辺市）
左／縦横無尽に文字列が並ぶ十二支考腹稿。どこから読めばいいのかわからない。（南方熊楠記念館蔵・白浜町）



上／昭和天皇が神島を訪れた際、熊楠は粘菌や海中生物についての御前講義を行い、田辺付近の動植物の標本をキャラメル^{キャラメル}の箱に入れて献上したという。
右／若かりし頃の熊楠はかなりのイケメン。（共に南方熊楠顕彰館蔵・田辺市）



熊楠が生まれ没した
和歌山とはどんな所？

仁坂 ●中沢さんは和歌山にどのような印象をお持ちでしょうか。

中沢 ●田辺市には、熊楠が昭和天皇にご進講した神島があります。また紀南地域は自然も豊かで、熊楠が言い残してきたことを忠実に守り、森林などを開発から保護してきました。熊楠の意思と街が一体化しているような気がします。また丸石様の存在があります。山梨県と静岡県の川沿いには、神様として丸い石をお祀りする風習があるのですが静岡で途切れます。その丸石を調査して歩いていると、再出現するのが和歌山のすさみあたりなんです。村の神というか既存の神社と

中沢新一(なかざわしんいち)

1950年(昭和25年)生。山梨県出身。東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。思想家・人類学者。チベットで仏教を学び、帰国後、人類の思考全域を視野にいたれた研究分野(精神の考古学)を構想・開拓する。著書に『森のパロック』(読売文学賞)、『緑の資本論』、『精霊の王』、『アースダイバー』(桑原武夫学芸賞)、『芸術人類学』、『野生の科学』、『日本文学の大地』など多数。近著に『熊楠の星の時間』、『俳句の海の潜る』(小澤實との共著)がある。これまでの研究業績が評価され、2016年5月に第26回南方熊楠賞(人文の部)を受賞。



森のパロック／著者：中沢新一／講談社学術文庫
熊楠の星の時間／著者：中沢新一／講談社選書メチエ

は関係なく、もっと古い神様なんだろうが、それが川筋ごとに祀られてありました。植物が豊かに育ちその木々の根元に丸石を祀る。その時僕は紀州という所はとつても不思議なところだなと思いました。

仁坂 ●熊楠が熊野の山中を歩き回っていた頃は、もっと色んな不思議があつたのでしょうけど。熊楠が保護を訴えた明治の神社合祀だけでなく、戦後の住宅難や紙需要でものすごく木材需要が高まり、和歌山の山々は猛烈な勢いで植林され、当時とは変わっているかもしれないが、それでも和歌山の自然は豊かです。

中沢 ●随分昔に大辺路や熊野三山を歩いた記憶があるんですが、植物相がすごく豊かなことに気がきました。また古座川にも行きましたが非常に綺麗だった。

仁坂 ●そうですね。しかし、滝の拝などがある支流は、もっと綺麗ですよ。

中沢 ●また「アースダイバー」という本の執筆のため、古代の遺跡を追っていました。そしてある時、東京タワーがある、芝浦付近に多くの「鈴木さん」が住んでいるのに気付きました。他にも多摩川沿いの村落や、東海の伊豆、羽田村あたりにも鈴木姓が多い。調べてみると鈴木姓の発祥は和歌山で、ある時期以降、紀州から大量の漁民として移住し、江戸時代にはさらに多くの鈴木さんが移り住んだようです。

仁坂 ●房総半島などに和歌山と同じ地名が多いのもそういう事なんでしょうね。また鈴木姓はもとより、醤油や古式捕鯨、鰹の一本釣りや鰹節なども和歌山が発祥なんです。はじめは和歌山です。しかし紀州人は何でもすぐ教えちゃう(笑)。

中沢 ●古式捕鯨というのは、鯨を捕るだけでなく加工プロセスまであり、日本人の自然観や生き方などを凝縮したようなもので、日本におけるマニユファクチャー(工場制手工業の原点だという人もいます。このシステムは京都の西陣織り工程の手法となり、そしてそれは戦闘機機の零戦の製造工程にまで進化したそうです。

仁坂 ●それは面白い。日本のマニユファクチャー発祥の地でもあるわけですね。実は明治維新の原点も和歌山にあるのではといわれています。紀州藩は陸奥宗光や津田出の活躍により、明治新政府に先駆けた藩政改革を実施しました。特に四民皆兵の徴兵制やプロイセン士官を招いた洋式軍隊の創設は、その評判を聞きつけた西郷隆盛が、津田出に新政府の総理になつてくれなにかとまで言ったそうです。そして廃藩置県や地租改正といった近代日本の礎となる施策に大きな影響を与えました。南方熊楠をはじめ、これら和歌山の偉人達は和歌山県民の誇りでもあります。本日はお忙しい中、誠にありがとうございます。



中沢 ●民俗学や神話に詳しく、世界的にも権威のある学術雑誌「ネイチャー」に発表していた論文などを見ると、それはもう間違いない当時の世界的レベルの学者だと思います。しかしそれは碩学だとか研究者たちでもできることですが、熊楠は違うラインで突き抜けている人だと予感がしていたんです。勉強ができるとか記憶力がいいだとか、そんなものを超えた所にいる天才で、ある瞬間、「焔めく時」が訪れるんですね。それは後の真言宗・高野山管長となる「土官法龍」と交わした書簡の中に記録としてきちんと残っています。それはものすごい記録で、熊楠が那智山中にこもっている最中に、脳というか知性が爆発しているんですね。それは人類史の中でも相当貴重で、人間の知性ってここまでいくんだなって所まで到達しています。しかしそれを本にし

知事対談

中沢新一×仁坂吉伸

思想家・人類学者

和歌山県知事

説明するのに時間がかかりました。「森のパロック」の段階でようやく7割ぐらいでしょうか。しかし「違う。こんなレベルではない」とずっとそういう予感がしていて、僕が60歳を超えた時に、「熊楠の気付いたことはこういうものだったんだ」とようやく言えるようになりました。

仁坂 ●それはどういふものですか？

中沢 ●熊楠は「南方マンダラ」というものを書いていきます。人間が「モノ」を考える際、脳中のニューロンが活性化しますが、そういう「モノ」を超えたものが人間にはあると「南方マンダラ」の中で唱え、そしてそれを探求する方法は仏教だということです。

仁坂 ●そういえば中沢さんは仏教の修行のためにチベットに行っていますね。

中沢 ●そうです。僕は若い時から自分の研究を進めるにあたり、おぼろげですが、そういう思考に至るためには仏教が重要だと思っていました。人類学を研究しても限界があり、「その先」に行くにはどうしたらいいか？と考えた時に、仏教を学ばなければならぬと思ったわけです。言い換えれば心の探求法なんです。ヨーロッパの心理学だとなかなか熊楠のような「その先」には行けない。スイスの心理学者ユングなど、あるレベルを超えている研究者は何人かいますが、それを求めるには仏教しかないと思い、出家をしようと30歳を前にチベットに行きました。それは日本でいうところの密教で、



その先生は在家のまま修行する行者でしたが、その修行は出家した僧侶より高度なことをやっていたんです。そしてその先生は、僕が求めているのは出家ではなく、精神探求の勉強であることを初めて対面した時から気付いていたんですね。仏教には人間の脳の仕組みを超えて行くような能力があり、具体的な形もあるんだとその先生はしきりに言うんですね。熊楠も仏教には人間の能力を超える力があると書簡の中で語っています。

仁坂 ●さすが中沢新一論。漠然とは分かりますが、なかなか難解です。

中沢 ●みんな分からないというんです。書けば書くほど分からないと言われるんですよ。それはそれで孤独です(笑)。